

63. 方言・子供の遊び

土地にはそれぞれ微妙な方言がある。鳥飼弁を話せるのも我々が最後や、という話を聞く。何とか記録しておいて欲しいものだ。子供の頃の遊びも聞いてみた。

◆方言は民衆生活史の好資料

方言には思わぬ古語の含まれていることがある。それがその地方の生活や文化の歴史の手掛かり、文化や技術のルーツを知る手掛かりとなることもある。本文でも時々古い言葉に出会った際には注記しておいたが、方言は消えゆく文化財なのだ。

仲間うちなら鳥飼弁も出るが、少し気のはると吉本流の大阪弁になってしまうという。ぜひ仲間うちで思い出話をして、そのテープを将来の資料館に寄贈してほしいものだ。

◆ノエキシえんなん

野良仕事に出かけることをノエイク（野へ行く）、ノエキ（野行き）と言った。「ノエキシえんなん（野良仕事に行かなあかん）」（別府の O さん、大正 2 年、1913）。

◆ヨロガワノミル……

鳥飼八町 I 氏（昭和 2 年、1927）からの鳥飼弁、川筋言葉。ヨロガワノミルノンデハララクラン（淀川の水飲んで腹だだ下り）。小学生の作文という話だったが、大阪市内生れの私もヨロガワノミル……という話は祖母から意味の分からぬまま聞いた記憶がある。

イオッソラン（居られない）／ナニシテケツカンネン、ナニサラシテンネン（……これは河内弁も同じ）／ソヤケロ（そやけど）／イッシク（しょっちゅう……古語に当たったが語源の見当がつかない）／ユーテマンデシタケド（言うてましたけど）／オシマイナハットクナハレ／アライテン（有らしません）、ソンナコトアライテンデ。

■子供の遊び□

◆I 氏…明治 41 年（1908）生れ、庄屋

ブランコ……木の枝へさいて紐ぶら下げてブランコをした。

メンコ……ガラス玉でポンと放って当て、粹から出たらとる。

バイ……紐つけてバイ回す。

セミ捕り。カブトムシは、この辺には木がないから、山（ジゼンジャマ）までとりに行った。

◆N さん…大正元年（1912）生れ、別府

女はナワトビ、マリツキ。オハジキ。ウツシエ（写し絵）。

オコンメ（お手玉）は自分でつくった。レース糸で毬入れの袋を編んだ。

ムギワラ……大麦の藁。麦わらで籠編んでグミを入れた。灯笼編んでぶら下げた。

お宮さんの境内で遊んだ。盆など店が出る。お寺が勤まると店が出た。

イナゴを捕りにいった。

男の子はコママワシ。5・6年の男子は淀川の中州へ水泳に行っていた。

◆M 氏…大正2年（1913）生れ、別府

ヒモトリ……冬には紐とりをした。1種の鬼ごっこ。20cmの色の紐を買ってきて切ってバンドに括る。紐に上下の位があり紐を比べる。

ニッキ・エンチョ……川原の柳（しだれていない柳）の枝を切ってきて、25cmぐらいに切って、先を尖らせる。投げて土に突き刺して、次の者が突き刺して倒す。ニッキといった。エンチョという所もあった。

バイも回した。ビー玉（ラムネ玉）がはやったのはもう大きくなってから。目の高さから落とせとか、腰の高さから落とせとか……。

夏にはバンタガワの用水で泳いだ。

◆I 氏…大正4年（1915）生れ、鳥飼八防

学校では淀川で泳いだらいかんといわれていたが蒸気船まで泳いでいって飛び乗った。

◆O 氏…大正10年（1921）生れ、一津屋

ナタネ菜をつくっていたが、実を落としたカラでホタルを捕った。カラをこう横にやるとホタルが中に入った。

神崎川は流れが緩やかで下が砂で綺麗。小学校の先生が旗をもって連れていく。川の中に旗たててバチャバチャ泳いだ。

◆I 氏…昭和2年（1927）生れ、鳥飼八町

タライに入ってかまぼこ板で一寸法師のまね。

田には水が張ってあった。冬になると一面の氷となる。そこで鳥飼小学校まで氷の上をズック靴で滑っていった。時として亀裂にはまることもあった。アカギレの手で温めた。

冬はバイ。タライにござを入れてはねとばす。丸いバイをコンクリートで角型に擦った。

ベッタン。イシダマ（ラムネ玉）。竹馬。カナワ（自転車のリムを棒で押して走る）。たこあげ。兵隊ごっこ。